

連句の部

特選

半歌仙『早苗哉』の巻

愛知県 ころも連句会

北原春屏
林 尚子
宮川尚子
西田青沙
(五十音順)
共選

出原 樹音 捌

雨折々思ふことなき早苗哉

芭蕉翁

一羽涼しく立てる白鷺

板倉 合

クレパスはスケッチブックいつぱいに

間瀬 芙美

髭伸びてゐる父さんの顔

稲垣 渥子

トレーラー行く先照らす月丸く

石川 葵

山積みにせし特産の柿

正村 有

二人して浅き夢見む秋遍路

平 羽州

新妻の切る豆腐大きめ

出原 樹音

豊満な胸はモンロー顔負けで

坪井眞知子

皮膚科で貰ふ亜鉛華軟膏

由川 慶子

ライオンが嗅いで悦ぶ象の糞

有

休日電車着ぶくれの客

羽

月冴ゆるホルムズ海峡荒れ模様

長坂 節子

雑音混じる短波放送

小野 芳梅

曾祖母の忌明けのお斎並びゐて

深津 明子

窓を開ければ軟東風の吹く

渥

石段を登る坂道花万朶

芙

里の子どもと遊ぶのどらか

羽

令和元年六月二十五日 満尾 豊田市福祉センター

入選

半歌仙『江戸土産』の巻

埼玉県

美々つと連句会 上野

成田 淑美 捌

芭蕉翁

富士の風や扇にのせて江戸土産
街道沿いに植田見晴らす

成田 淑美

多国籍料理教室にぎわいて

仲澤 輝子

魔法のランプアブラカタブラ

中村ゆみ子

蹲踞に映る満月揺り零し

大堀 春野

松の手入に励む園丁

淑美

下総の撫でられそうな秋の山

春野

こちらを向いて欲しい寝姿

淑美

利き酒に酔ったひと夜が始まりで

輝子

神前・仏前・出来ちゃった婚

ゆみ子

幼な子の描くライオンは口ばかり

春野

衿立てて見るマチュピチュの月

大石 壽美

二千万なければ百まで生きられぬ

淑美

小さき流れがやがて大河に

ゆみ子

QRコードで雨の予報読む

壽美

耕しながら故郷の唄

輝子

初花へ嬰の手足のよく伸びて

壽美

珈琲の香に春を惜しめり

ゆみ子

令和元年六月十九日 満尾 川口ファミレス・ジョナサン

半歌仙『啄木も』の巻

茨城県

水無月連句会

片野 弥恵 捌

芭蕉翁

啄木も庵はやぶらず夏木立
碑古りて涼風の中

片野 弥恵

肩車パパの背中の大きくて

筒井 香

スクランブルの雑踏を行く

根本美茄子

久闊の友集まりて月の宴

弥恵

盆に添えたる野菊ひと枝

香

やや寒き矢切の渡し柴又へ

美茄子

演歌のさわり口ずさみつつ

弥恵

振り返る男結びの粋な方

香

マダムキラーのビーム強力

美茄子

風止んで街穏やかに暮れなずむ

弥恵

帽子斜めに猫の駅長

香

北の宿月を掬って冬至の湯

美茄子

亭主の奢り河豚の鱈酒

弥恵

MRIの結果海馬は大丈夫

香

円空仏の笑顔たおやか

美茄子

双峰を望む堤の花の帯

香

ポートルースへ送る声援

弥恵

令和元年七月二十二日 満尾 インターネット

半歌仙『梢より』の巻

奈良県

あしべ連句会

松本奈里子 捌

芭蕉翁

松本奈里子

三原 寿典

奈里子

もりともこ

寿典

山本 天球

谷澤 節

奈里子

ともこ

寿典

節

奈里子

天球

ともこ

奈里子

寿典

節

梢よりあだに落ちけり蟬のから

礎石の光る夏はたけなは

摩天楼マラソン選手駆け抜けて

見慣れね旗も混じる町並

三重に暈をにじませ初月夜

新酒とくとく粋な楽焼

残菊に囲まれて逝くお聖さん

関西弁で油断させられ

箸ころげ笑ひころげる君が好き

この温もりはきつと逆夢

本棚に乱歩全集どつしりと

冬眠中と貼り紙の家

神の留守月が預かる大八洲

オセロゲームは白の圧勝

犬猫のインスタグラム世界より

台所からのぞく浅葱

散りてなほ流れ彩る花筏

歌声はづむ遠足のバス

令和元年七月二十日

満尾

難波学習センター・文音

半歌仙『雉子の声』の巻

静岡県

遅刻坂連句会

半田 有杜 捌

芭蕉翁

半田 有杜

今富 千辺

石田 耕庵

井田 瑞亭

久保田田朴

千辺 有杜

埴 於玉

耕庵 瑞亭

田朴 千辺

於玉 主水

耕庵 田朴

瑞亭

瑞亭

瑞亭

瑞亭

瑞亭

瑞亭

父母のしきりに恋し雉子の声

名残の雪にゆるむ柚道

焼き網に栄螺いくつも盛り上げて

行列長き評判の店

月光に考へる犬影蒼し

ゆく秋惜しみ独り酌む酒

珍しや牡蒿と教へられ

生徒と先生垣根あやふし

逢ひたくて逢へば逢ふほど息重く

相合傘もけふをかぎり

亡き友の忘れ形見は時の人

旅の車内に揺れる風鈴

山笠の駆けぬく背に明の月

セデス・バファリンどれが効くやら

わが庵は高層ビルの最上階

川面を渡る風やはらかに

訪ひゆかむ三春の里の花の滝

八十八夜の眠り安けく

令和元年七月十八日

満尾

九段生涯学習館

半歌仙『飛ぶ螢』の巻

京都府 古都連句会

衆議判

草の葉を落つるより飛ぶ螢かな

芭蕉翁

里は涼風碧む山の端

吉村佳代子

深庇老い猫大きあくびして

石田千枝子

袱紗捌きは古稀の手習ひ

月二つ見えるとぼつり母の声

金木犀の香る庭先

手に馴染む志野のぐい呑み古酒なめる

喧嘩相手の妻が先立ち

見抜きなよほんと馬鹿だね男つて

菩薩はふふ雲の上から

パリの朝バケツト抱へ裏通り

ヒール着用自由選択

鉄塔のつらら光らせ白き月

三尺余り掲ぐ陣太刀

コスプレでアニメの聖地巡る旅

おやゆび姫は胸のポケット

花守の承伝の枝花大樹

ほんぼり灯す春宵の街

令和元年七月十四日 満尾 文音

半歌仙『象潟や』の巻

茨城県 水無月連句会

小岩 菖蒲 捌

象潟や雨に西施がねぶの花

植田にすくと立てる白鷺

画学生ドロイーイングを丹念に

窓全開に深呼吸する

叢雲を従え月の大らかさ

声もさやかに音読の子等

世話人の櫛も凜々し秋祭

愛を型どる館細工あり

カップルは美女と野獣と口の端に

アブラカダブラ夢の国へと

なだらかに古里の山連なりて

伊達政宗の像は勇壮

鰯酒の五臓六腑に染み渡り

寒稽古終え仰ぐ上弦

駅前の駐輪場は屋根つきで

孕み野良猫のっそりと去る

さまざまな余興飛び出す花の宴

髭の恩師の笑顔あたたか

令和元年七月二十日 満尾 インターネット

芭蕉翁

小岩 菖蒲

高木 遥子

片野 弥恵

後藤 算子

遥子

菖蒲

算子

弥恵

菖蒲

遥子

弥恵

算子

遥子

算子

弥恵

菖蒲

遥子

半歌仙『散る柳』の巻

富山県

いなみ連句の会

宇野 恭子 捌

芭蕉翁

宇野 恭子

八尾暁吉女

庭掃て出ばや寺に散る柳

見送る門をよぎる秋蝶

船溜り十六夜影をゆらしゐて

最終バスはがらあきのまま

念願の陶芸村に居をかまへ

トマトを浸す山の湧水

籐椅子にいつもの顔が釣談義

決め手となつたたつたひとこと

愛情も老後資金もたつぷりよ

女房の里の味に慣らされ

地下街を行きつ戻りつ迷ひ道

盲導犬は待ての姿勢に

貰ひ物きくか効かぬか風邪薬

月も聞くらん夜神楽の笛

ことの外祝儀不祝儀入りまじり

人生いろいろ夢もいろいろ

候補者もしばし休戦花の下

瓢の酒を腰に野遊

執筆

令和元年六月二十九日 満尾 文音

半歌仙『山賤の』の巻

愛媛県

白水台連句会

大月 西女 捌

芭蕉翁

大月 西女

名本 敦子

岡田伊勢子

杉山 豚望

向井由利子

大西 素之

西女

敦子

豚望

敦子

由利子

豚望

由利子

伊勢子

敦子

素之

伊勢子

令和元年五月三十一日 満尾 道後白水亭

半歌仙『峠かな』の巻

東京都

岡部七兵衛 捌

芭蕉翁

岡部七兵衛

城 依子

齊藤 桂

八尾暁吉女

依子

七兵衛

暁吉女

桂

七兵衛

依子

桂

暁吉女

依子

七兵衛

暁吉女

桂

執筆

令和元年五月一日 満尾 インターネット

半歌仙『初眞桑』の巻

富山県

北野眞知子 捌

芭蕉翁

宇野 恭子

北野眞知子

恭子

眞知子

恭子

眞知子

恭子

眞知子

恭子

全

眞知子

恭子

眞知子

恭子

眞知子

恭子

執筆

令和元年六月一日 満尾 文音

雲雀より空にやすらふ峠かな

髪をなでゆく寒明けの風

雛の客揃ふ座敷の和やかに

琴にギターにピアノカもあり

月見船漕ぎ手は若く無口にて

目に映るものなべて爽涼

そぞろ行く道はいつしか紅葉寺

車椅子には初恋の妻

思ひ出のカフェで向き合ふ昼下が

潮の音ひびくヴェネツィアの街

犬の仔と戯れてゐる幼児達

そつと見守る母のまなざし

デザインも色もユニーク新浴衣

ビール飲み干す月のペランダ

きりもなく待つたの続くへぼ将棋

柱時計は時を忘れる

揺り籠の嬰はすやすや花の昼

令和の春をめぐる老翁

初眞桑たてにわらんや輪に切ん

緋の甚平似合ふ腕白

河川敷軟式ボール転がりて

路面電車は今日も満員

望の月杳脱ぎ石に腰を掛け

どぶろく醸す蔵の片隅

にこやかな遺影身に入むことさらに

一通だけの恋文があり

深窓を捨てて駆落ち夢心地

止めた煙草にまたも手が伸び

本棚にずらり鬼平犯科帳

たすきがけして御堂清める

ラガーマン泣くなと月に励まされ

三億円の鮎糶る市

叱つても捻挫の足にじやれる猫

孫に譲つた鉋鋸

薄墨の花に逢ひたくこの里へ

万古の森に風のやはらか

半歌仙『前髪も』の巻

徳島県

徳島県連句協会

東條 士郎 捌

芭蕉翁

前髪もまだ若草の匂ひかな

春の扇を閉づる松羽目

昼餉とて紅鱒の膳運ばれて

三年ぶりに客人のあり

月あまた小さき棚田のそれぞれに

雲居の雁の消ゆる山稜

胡桃割る女の殻を慈しみ

豊満な胸捨てどころなく

島原に固き起請を取り交はし

何はともあれものをいふ金

式阡萬ありやなしやと冬の月

襟掻き寄せる討入の日に

コップ酒身の上ばなし長々と

癌の成り行き神頼みのみ

偶然と必然の差を聞かまほし

ペダル揃へて駆けるタンDEM

ドンと鳴りや猫も飛び出す大花火

氷菓の匙を落とす腕白

令和元年六月二十三日 満尾 渭東コミュニティセンター

半歌仙『飛ぶ螢』の巻

神奈川県

おおすみ連句会

前田 明水 捌

芭蕉翁

草の葉を落つるより飛ぶ螢哉

五月雨の頃谷戸も鎮まる

寄合は唐物飾る庵にて

地元の銘菓甘さひかへめ

名残茄子実るお背戸に望くだり

忘れ扇に認める和歌

朝冷えの小余綾こゆるぎの磯連れだちて

ひと夜の契り明けて久しく

方寸に秘めたる想ひ今もなほ

止り木だけの横丁の店

為政者のマトリョーシカを棚にのせ

非難の磔なげる野党紙

駅前にはトランペットの社会鍋

月皓々と梟の啼く

我が町は聖火リレーの通る町

記念硬貨の図柄発表

公達の面輪ゆらりと花篝

陽炎のなか馬の嘶き

令和元年六月二日 満尾 鳴立庵(大磯)

半歌仙『清滝や』の巻

愛媛県

白水台連句会

向井由利子 捌

芭蕉翁

向井由利子

杉山 豚望

大月 西女

大西 素之

名本 敦子

岡田伊勢子

敦

西

由

素

豚

豚

伊

敦

西

由

豚

清滝や波に散込青松葉

涼しき風をはらむTシャツ

笛の音の何方よりか流れきて

父の胡坐にねまる三毛猫

枝豆も酒もおあづけ月を待つ

厨の水の指に冷やか

鹿火屋守数珠をもみつつうとうと

もののけだとして美女は歓迎

五十路とて恋の門戸は広く開け

等間隔に並ぶ電柱

原発の廃炉作業は遅々として

捕鯨船行く月光の海

風邪の子にイソップ童話読み聞かせ

天井裏にひそむ盗人

果てしなき宇宙旅行の夢どこへ

朝日を浴びて粉蝶の羽化

全山を覆ひつくして花の雲

小さき祠に積もる春塵

令和元年六月二十一日 満尾 道後白水亭